



## ソ連

### ——懐かしの機内食——

岡 奈津子

小さいころから様々なゲテモノや珍味に触れてきた信州育ちの私。馬刺しや蜂の子はもちろん、イナゴとつくしに至っては、食べるだけでなく採取もやっている。そのせいか、「珍食」と言えるほどの食べ物に出会ったことは、実はあまりない。

もちろん、日本人にはちょっと珍しい、という程度の代物なら口にすることはある。その脂っこさに思わずたじろいでしまう、ウクライナ名物のサーロ（豚の脂身の塩漬け）。カザフスタンの馬肉ソーセージは、現地に行くとき勧められるごちそうの一つだ（長野県人の私はとくに驚かないが）。モンゴルに程近いシベリアの町ウラン・ウデで飲んだミルクティは、意表を突く塩味だった。

しかし食べ物の話で真っ先に思い出すのは、珍味よりも留学時代の経験だ。

私は1990年から1991年にかけて、10カ月ほどモスクワに住んでいた。ちょうどソ連が内側からじわじわと崩壊し始めていた時期だ。ペレストロイカ（建て直し）を掲げて颯爽と登場した指導者ゴルバチョフは、国外では高く評価されていた。しかし経済はガタガタで、国民の支持は下がる一方。1年先に日本を出発した先輩たちが作ってくれた留学案内には、ゴルバチョフの改革のおかげで店から物が消えたと、皮肉交じりに書かれていた。

その言葉どおり、物不足には悩まされた。特に大変だったのが食べ物だ。

スーパーに行っても限られたものしか手に入らない。パンとキャベツと冷凍イワシだけとか、とにかく品数が少ないのだ。たまに、なけなしの米ドルを握りしめて外貨ショップに入ると、その品ぞろえに頭がクラクラしたものだ。チーズを買う行列に何十分も並んだ末、目の前で品切れになったときは心底がっかりした。

レストランでメニューを指しても、実際にはないものも多かった。モスクワに行く前から一種のジョークとして耳にしていたが、食事を注文しようとして「ニェット」（ない）を連発されると、ああ、本当にな

いんだ、と妙に感心した。

それでもたまには料理を作ったこともある。寮の住民の大半はソ連人学生だったが、主に社会主義友好国から来た留学生たちも住んでいて、時折、お互いを招いて手料理をふるまった。私はもう一人の日本人学生と協力して親子丼に挑戦した。明日の×時ごろに××近くのスーパーで卵が買えるらしい、とかいう不確かな情報をもとに買い出しに走ったのも、懐かしい思い出だ。

社会主義下の不足経済とサービスの悪さを身をもって経験した私だが、なかでも衝撃的だったのがアエロフロート国内線の機内食だ。

それはトレイではなく、無造作に仕切られた紙箱に入っていた。外側は白だが、内側は灰色。食べ物から出た汁や油でところどころ黒いシミができていて、ただでさえおいしいとは言えない食事がさらにまずそうに見えた。

箱の印象が強烈だったので中身については少々記憶があいまいだが、入っていたのは確か、干からびて硬くなったサラミソーセージのスライスと、しなびたトマトの切れ端。叩けばコツンと音がしそうなカチカチのパン。もしかしたらロシア料理の定番、きゅうりのピクルスもあったかもしれない。

食後のドリンクを入れるカップはプラスチック製で、親指と人差し指でようやくつまめるくらいの、穴のない小さな取っ手がついていた。そこに、丸々とした二の腕の客室乗務員が、インスタントのまずいコーヒーか、それよりはやましな味がする紅茶を、不愛想かつぞんざいに注いでいくのである。

食事は美味いに越したことはない。ただ、こんなにそっけなく、人を寄せ付けられないような機内食は、もうなかなか拝むことはできないだろう。私はソ連時代をぎりぎり体験できたことを、非常にラッキーだと思っている。

（おか なつこ／アジア経済研究所 中東研究グループ）